弥生土器
の出土状況

石鏃の
出土状況

柱穴における
地鎮の痕跡

発掘調査の成果

今回の重要な成果は中世前半期の掘立柱建物跡もしくは柵列などと考えられる**柱穴列**です。調査範囲が限られていたことからこの柱穴が構成する建物の内容までは分かりませんでしたが，青磁や白磁などの**中国から輸入した陶磁器類**などの稀少品が出土したことから，この地にはこのような稀少品を入手することのできる有力人物がいたことが想定でき，そのような人物の建物であった可能性が推測されます。

注目されるのが本調査地周辺を本拠地としていた**由佐氏**です。由佐城跡の調査では近世初頭の遺構が見つかっていますが，中世の状況はよくわかっていません。直接的に由佐氏に結びつけることはできませんが，周辺での今後の調査が期待されます。

本調査地は明治９年頃（愛媛県時代）の地籍図では田となっていますが，近世末（幕末）から近代初頭にかけての遺構および遺物が確認できたことから，近代以前と以後で土地利用の状況が変わった可能性があります。また，瓦が多数出土したことから近くに瓦葺の建物があったと考えられます。瓦の中には「**且紙**」の刻印があり，檀紙村から供給されていたことも明らかになりました。

水場 関連遺構

編集後記

今回は高松市内でも南に位置する塩江・香南地区で近年実施された発掘調査を取り上げました。

調査数はまだ少なく地域の歴史の解明にはまだまだ至りませんが、今回の調査は、いまだ十分に知られていない歴史の１頁を知る非常に重要な機会となりました。

今後の調査の蓄積と関連する文化財の総合的な検討などからさらに**高松という地域とその歴史の解明**に尽力したいと思います。

むかしの高松

第27号　2014年3月

編集発行　高松市創造都市推進局文化財課
高松市番町一丁目8番15号
tel 087-839-2660
http://www.city.takamatsu.kagawa.jp//886.html

むかしの高松

2014年3月
第27号

塩江・香南地区を掘る

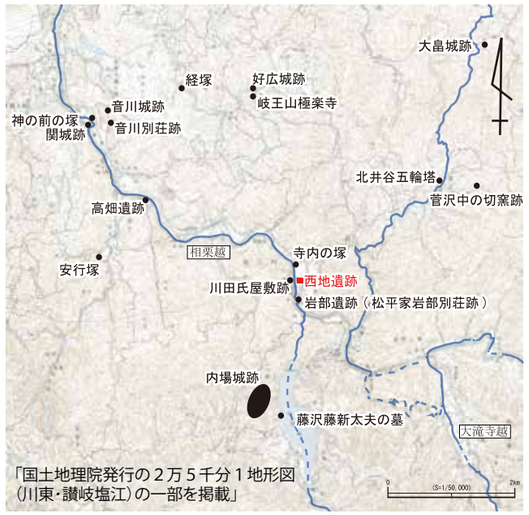
西地遺跡と条里跡編

条里跡の条里の溝の全景

塩江町で初めての発掘調査　－西地遺跡－

西地遺跡は，高松市**塩江町**に所在する高松市立塩江中学校内で新校舎建設工事に伴って発見された集落跡です。香東川上流域の山間部に形成された**河岸段丘**（河底が下がる過程で形成された段状の平坦面）上に位置します。中世～近世における阿波との主要交通路であった**「相栗越」**が遺跡西側を通り，当該道路を見下ろす位置に音川城，内場城をはじめとする中世の城館が複数築かれています。このように，西地遺跡は阿波との交通の要衝にも位置していると言えます。香東川上流域である塩江町での本格的な遺跡の発掘調査は今回が**初めて**です。

西地遺跡周辺の主要遺跡分布図



「国土地理院発行の２万５千分１地形図
（川東・讃岐塩江）の一部を掲載」

塩江町内主要遺跡の移り変わり

現在

塩江地区小・中学校建設

2014 年

音川別荘跡（おんがわべっそうあと）（寛永 19 年 7 月 22 日・8 月 3 日訪問）
高松藩初代藩主である松平頼重の別荘で，夏季の避暑地として利用されました（参考文献３）。

江戸時代

1600 年

関城跡（せきじょうあと）（1579 年）
川田信濃守の居城とされています（参考文献１）。

川田氏屋敷跡（かわだしやしきあと）（1579 年）
天霧城主香川元信の甥川田景安は権兵衛尉と称し，岩部に移り住んだといわれています（参考文献１）。現在も，西地遺跡西側の丘陵裾部に土塁や石垣が残されています。

1400 年

室町時代

甲斐殿城跡（かいのまたじょうあと）（中世？／江戸時代）
『全讃史』によると伊豆八郎信能の墓とされています。江戸時代の墓と炭焼き窯跡がありますが，城跡とすべき遺構は現在のところ確認されていません（参考文献１）。

音川城跡（おんがわじょうあと）（時期不詳）
川田信濃守景信の居城であり，標高 260mの小山の頂部に築かれています。堀や土塁が発見されています（参考文献１）。

西地遺跡（にしぢいせき）

1200 年

鎌倉時代

内場城跡（ないばじょうあと）（藤澤氏：1184 年／川田氏：1441 ～ 1443 年）
藤澤氏・川田氏の居城とされており，堀や土塁などの遺構が良好に残っています。（参考文献 1）

1000 年

800 年

平安時代

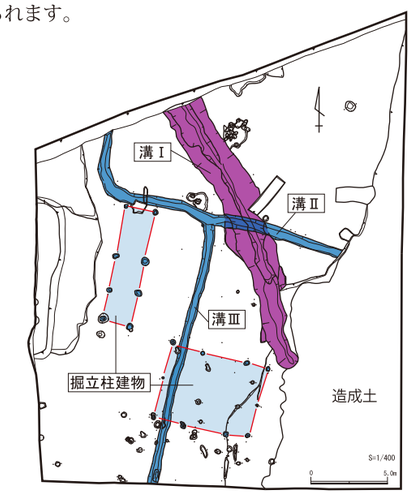
参考文献　1 香川県教育委員会編 2003『香川県中世城館詳細分布調査報告』
2 塩江町史編纂に委員会編 1996『新修 塩江町史』
3 松平公益会編 1964『高松藩祖 松平頼重傳』

発掘調査された溝と建物跡からわかること

今回の調査では，平安時代～江戸時代（約 1,100 年前～約 150 年前）の**溝跡**や**掘立柱建物跡**，その他多くの柱跡などを確認し，土師器（土師質土器）や須恵器，陶器，磁器などが出土しました。

平安時代には，遺跡東側の香東川から河岸段丘上へと導水するための灌漑用水路であると考えられる溝Ⅰが掘削されます。建物跡は見つかっていません。

鎌倉時代には，２条の溝（溝Ⅱ・Ⅲ）が掘削され，特に溝Ⅱは江戸時代まで利用され続けます。２本の溝は直角に交わるとともに，溝ⅡはＬ字状に曲がっています。また，鎌倉時代以降に掘立柱建物が少なくとも２棟，溝に平行するように建てられます。他の多くの柱跡もこの時期に形成されたと考えられることから，他にも複数棟の建物が存在したと考えられます。遺跡周辺では**土地を正方形や長方形に区画し，宅地や耕作地として利用する傾向**が鎌倉時代以降，見られるようになったと言えます。この背景として考えられるのは，香東川河底の低下です。平安時代には河底が比較的高く，河川の氾濫が頻繁に生じていたと考えられますが，鎌倉時代以降は香東川の河底が低下し，西地遺跡の位置する河岸段丘上でも居住や耕作などを目的とした積極的な土地利用が開始されたと考えられます。



西地遺跡遺構配置図

香南町での発掘調査　－条里跡－

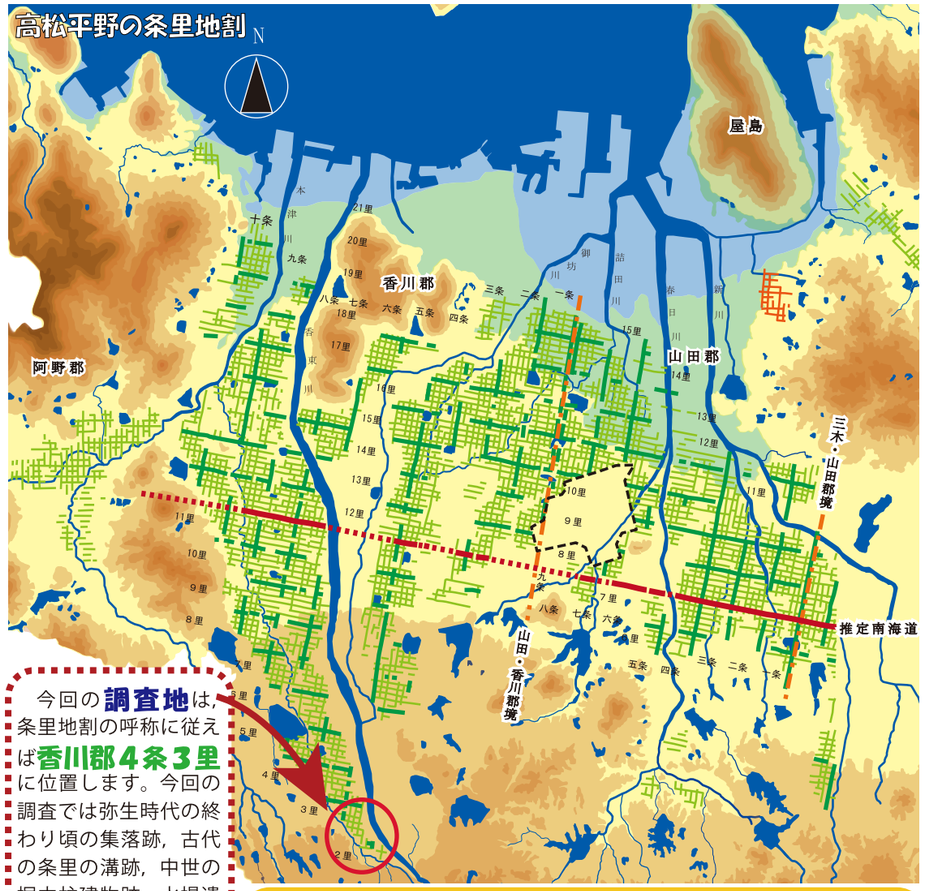
「条里跡」・・・・

よく聞く言葉ですが，どのようなものでしょうか？

簡潔に言えば，**方形に区画された地割**です。現在も，香川県全域の平野部の地図や航空写真を見てみると整然と区画された方形の地割を目にすることができます。高松平野でも広く条里地割が認められます。

これは現在のほ場整備などの区画整理と似ており，今から約 **1300 年前の国家直営の区画整理事業**と言えます。この条里制は大化の改新後，天皇を中心とした国家体制の整備のに向けて，土地と人民の統治のため一度に施工された公的制度として理解されてきましたが，近年では，墾田開発の増加に伴い，次第に広く施工されたとも言われています。いずれにしても，いつ施工が開始され，いつ現在の姿になったかはよくわかっていません。

さて，**讃岐国**の場合は，郡の東から**六町**ごとに南北に線を引き，一条，二条と呼び，同じく東西に線を引き，南から一里，二里と呼び，**○条○里**として土地の位置を明らかにしました。さらに，一町ごとに区画し，その一区画を**一坪**と呼び，各区画の東南隅から西に一の坪，二の坪と数えます。



今回の**調査地**は，条里地割の呼称に従えば**香川郡４条３里**に位置します。今回の調査では弥生時代の終わり頃の集落跡，古代の条里の溝跡，中世の掘立柱建物跡，水場遺構，近世末の井戸跡などを確認することができました。条里の溝の方位は東にほぼ **10°** 振れており，高松平野で一般的な方位と同じです。

Point　一般的に，方形に区画された土地の周囲には畔や溝などがあります。現在，見ることができるものは 1300 年前のものではなく，**素掘り**から**石組み**へ，さらに**コンクリート**へと変化し，新たな技術で作りかえられたもので，多くが，当初の位置からややずれています。その一方で，条里がない箇所もあります。これは後世の造成等で区画が壊されてしまった場合や，もともと川や池などの障害物があり，区画を設けることができなかった場合などがあります。後者の場合，今は分からない**昔の地形**が分かることもあります。